

## 2000年度の環境負荷削減実績とレビュー

## 事業所

## ( 省資源・リサイクル )

## 2000年度実績

最終処分量は1999年度比削減率35.6%を達成しました。

- ・ 廃棄物の総発生量…… 35,300t
- ・ 廃棄物の最終処分量…… 3,919t

( 25～28ページを参照 )

## ( 省エネルギー )

## 2000年度実績

- ・ CO<sub>2</sub>排出量…… 243,586t
  - ・ 1999年度比削減率…… 0.85%
- リコー単体では、1990年度比で、CO<sub>2</sub>排出量は9.8%削減、売上高原単位は20.1%削減しています。

( 29～30ページを参照 )

## ( 汚染予防 )

## 2000年度実績

- 1999年度比で、使用量12%削減、排出量16%削減を達成しました。
- ・ PRTR対象物質の使用量41,907トン
  - ・ 排出量21,894トン

( 31～32ページを参照 )

国内では16拠点すべての生産系事業所でごみゼロを達成し、海外拠点においてもフランス、米国、メキシコのすべての生産系事業所でごみゼロ達成をしました。イギリス、台湾、中国の生産拠点でも、ごみゼロを目指した活動をしています。また、青山本社事務所や販売会社である福井リコーでもごみゼロを達成しました。今後さらに、再資源化の内容の向上と、発生抑制(資源消費抑制)に取り組んでいきます。

ごみゼロ活動は、循環型社会の実現に向けて、資源の効率利用を推進する上で必要不可欠な活動であると共に、社員が一丸となった活動として環境保全活動への参加意識を高めるために重要な活動です。多くの社員が環境保全に関する認識を高めることにより、他の環境保全活動に対する理解を深めることに役立っています。継続して社員の自主的な活動を促進し、環境保全の啓発に役立てていきます。

CO<sub>2</sub>排出量の削減について、リコーグループでは、1998年に「売上高原単位」という指標に基づいた行動計画を立て、2010年までに1990年度比で56%削減することを目標に設定しました。これは、事業規模の順調な拡大と、京都議定書の目標年である2010年度に向けてCO<sub>2</sub>排出絶対量を削減するという2点を配慮した目標値です。途中段階である2001年度には、この指標を15%削減することを目標にしていますが、リコー単体では2000年度ですでに達成しており、またリコーグループの関連会社においてもほとんどの会社が2000年度中に目標の15%を達成しています。また、CO<sub>2</sub>排出量の絶対値はリコー単体で1990年度比9.8%削減されています。

今後2010年の目標に向けた新たな施策として、太陽光や風力などの新エネルギーの導入を開始しています。部分的ではありますが、太陽光発電による電力で生産工程での製品運搬を実施したり、風力電力を活用する「グリーン電力証書システム」への参画なども進め、多角的な施策で目標達成を目指しています。

リコーグループでは事業所での化学物質の使用・排出による環境影響を低減するために、PRTR対象物質の使用・排出量に対して、2001年度に1997年度比で使用量20%削減、排出量50%削減という目標を設定しています。

化学物質による環境影響を低減するためには、より環境影響の少ない物質への代替が重要であり、環境影響のある物質を使用せざるをえない場合は、その使用・排出量を抑制する必要があるという観点から、対象物質に対して環境影響度による重みづけ(環境影響度係数)を行い、それぞれの物質の使用量・排出量にその係数を掛けて合計した値を、全体の使用量・排出量と定義しています。使用量についてはすでに2001年度の目標値を達成しています。排出量については、活動開始から多くの成果を上げ、今年度は部品などの洗浄に使用するジクロロメタンの全廃などにより2001年度の目標を達成する見込みです。

## 製品

## （省資源・リサイクル）

## 2000年度実績

- ・複写機の世界回収量：181,039台
- ・トナーカートリッジの世界回収質量：812t
- ・再資源化率(2000年度下期)  
複写機：日本96%、米州77%、欧州50%  
カートリッジ：日本77%、米州98%、欧州100%

(39～44ページを参照)

リコーグループは、製品を可能な限り長く使っていただくことにより、資源を有効に利用することを優先して考え、製品が使用済みとなった場合には、循環型資源として有効に活用することを目標に、日本はもとより、世界規模での使用済み製品の回収・リサイクル体制の構築を目指しています。2000年度は、全世界で181,039台の使用済み複写機を回収・リサイクルしました。トナーカートリッジの回収についても、2000年度は全世界で812トン回収・リサイクルしました。今後、米州・欧州における回収・リサイクル活動を強化していく予定です。2001年度は使用済み複写機・トナーカートリッジともに、より高い回収量・再資源化率を実現できる見通しです。

回収・リサイクルにかかるコストに関しては、リユースや再生資源販売などによる収益を上回っています。リコーは、使用済み複写機・トナーカートリッジの回収により、環境負荷の削減と利益創出の両立による環境経営を目指しています。そのため、今後はより環境負荷が低く、利益を創出しやすいリユースを推進していきます。

## （省エネルギー）

## 2000年度実績

- エネルギー消費は、1996年度比で以下の値を達成しています。
- ・カラー複写機・複合機：33.5%削減
  - ・白黒複写機・複合機：10.5%削減
  - ・ファクシミリ：79.7%削減

(35～37ページを参照)

カラー複写機は、昨年度発売された製品の省エネ性能が高かったため、大幅にエネルギー消費の指標が向上し、すでに2001年度目標を達成しています。白黒複写機は、2000年度末に従来機のエネルギー消費効率の約4分の1という大幅な省エネ性能と使いやすさを実現した「QSU技術<sup>\*</sup>」を搭載した複写機を発売しましたが、年度末発売であったため2000年度のデータの改善にはあまり寄与しませんでした。2001年度は、これにより大幅に改善されることが見込まれています。

リコーは、「省エネ」と「使い易さ」を両立する技術の開発により、市場の省エネを加速できると考えています。白黒複写機において、待機時7Wの消費電力状態から、10秒で復帰するという「QSU技術」の開発により、立ち上がり時間の不満を緩和し、省エネモード使用推進をしてもらえる可能性を広げました。

このQSU技術の開発により、印刷速度が50枚/分以下の製品群において、「省エネ法」の2006年度目標基準値を5年前倒しで達成しています。

\* 36ページを参照。

## （汚染予防）

## 2000年度実績

- ・画像機器1台当たりのオゾン排出量：0.060mg/m<sup>3</sup>
- ・粉じん排出量：0.013mg/m<sup>3</sup>
- ・騒音待機時：45.9dB(A)
- ・騒音稼働時：68.2dB(A)

(31～32, 38ページ参照)

リコーグループは、製品に含まれる化学物質が廃棄されたときの環境への影響を低減するために、鉛、塩化ビニル、六価クロムの製品への含有率を1997年度比で50%以上削減することを目標に活動を進めています。2001年6月から国内において、これらの物質を削減した製品の発売を始めます。これらの物質については、今後、適正処理を進めるためのコストの増加が見込まれます。製品が回収されるピークとなる5年先を見越して、回収・リサイクルを含めたトータルコストを考え、今後はさらに削減活動を進めます。また製品使用時にわずかに排出されるオゾン、粉じんおよび騒音について削減目標を定め、活動を行っています。オゾンは目標を大幅に上回る改善が進み、粉じんおよび騒音についても目標を達成できる見込みです。リコーグループは1992年に騒音基準を制定し、1993年の製品排出物基準を制定して以降、段階的に社内基準の改定を推進するとともに、それに合わせた技術改善に取り組んできました。今後も、お客様満足度の向上の一環として、お客様からのご要望を考慮した活動を進めます。